

***元天文台職員入江誠氏から引き継いだもの（日面経緯度線図など）**

元国立天文台職員であった入江誠氏は、筆者より3歳年上である。氏は天文情報センターの質問電話当番に欠員が生じた時にピンチヒッターとして時折天文台にやってくる。氏が保管してあったものが散逸するのを心配し、アーカイブ室を立ち上げた筆者にいろいろなものを託すのである。今回、入江氏から託されたものは以下のとおりである

- 1) 「乗鞍の記憶」DVD1枚（これは以前に1枚いただいていた）
- 2) Japan Illustrated The Japan Times QUARTRLY MAGAZINE 1969. Vol. 7. No. 2
（長沢さんが書かれた英文の乗鞍コロナ観測所の紹介記事が載っている）
- 3) フォト 1992年（平成4年）11.1 November
（野辺山太陽電波観測所の電波ヘリオグラフの記事が載っている）
- 4) 東京大学東京天文台封筒2枚(21.5x27.5cm)
- 5) 東京大が東京天文台封筒2枚(24.1x32.8cm)
- 6) 日面経緯度線原図 (Stonyhurst Sun Disk) フィルム1箱
 1. $B=+2^\circ$ $B=-2^\circ$ 、 2. $B=+1^\circ$ $B=-1^\circ$ 、 3. $B=+0^\circ$ $B=0^\circ$
 4. $B=+3^\circ$ $B=-3^\circ$ 、 5. $B=+4^\circ$ $B=-4^\circ$ 、 6. $B=+5^\circ$ $B=-5^\circ$
 7. $B=+6^\circ$ $B=-6^\circ$ 、 8. $B=+7^\circ$ $B=-7^\circ$ 、 9. CORONAL GRID INTENSITY (5303) 以上は黒いビニール袋入り
 1. $B=+2^\circ$ $B=-2^\circ$ 、 2. $B=+1^\circ$ $B=-1^\circ$ 、 3. $B=+0^\circ$ $B=0^\circ$
 4. $B=+3^\circ$ $B=-3^\circ$ 、 5. $B=+4^\circ$ $B=-4^\circ$ 、 6. $B=+5^\circ$ $B=-5^\circ$
 7. $B=+6^\circ$ $B=-6^\circ$ 、 8. $B=+7^\circ$ $B=-7^\circ$ 、 9. CORONAL GRID INTENSITY (5303) 以上は東京天文台太陽物理部と書かれた紙のファイルケースに入っている
- 7) 日面経緯度線原図 Stonyhurst Sun Disk $B=0^\circ$ （透明なもの） 2枚
- 8) 日面経緯度線原図 Stonyhurst Sun Disk の陰画フィルム
 1. $B=+0^\circ$ $B=0^\circ$: 5枚、 2. $B=+1^\circ$ $B=-1^\circ$: 6枚、 3. $B=+2^\circ$ $B=-2^\circ$: 4枚
 4. $B=+3^\circ$ $B=-3^\circ$: 3枚、 5. $B=+4^\circ$ $B=-4^\circ$: 4枚、 6. $B=+5^\circ$ $B=-5^\circ$: 3枚
 7. $B=+6^\circ$ $B=-6^\circ$: 4枚、 8. $B=+7^\circ$ $B=-7^\circ$: 8枚
- 9) A3判の日面経緯度線原図 5枚
- 10) 透明の分度器の線図フィルム : 2枚
- 11) 分度器の陰画フィルム : 2枚

写真1がDVD「乗鞍の記憶」である。この中には大量のデータが入っている。その紹介は稿を改めるが、ファイルが次の27個ある。乗鞍コロナ観測所建設から閉所に至る60年間の貴重な記録であり、データである。1. 試験観測隊、2. 10cmドーム建設工事、3. 10

cmコロナグラフ、4. 紅炎早撮り装置、5. 25 cmドーム建設工事、6. 25 cm搬入組立、7. 25 cm k 路なグラフ、8. 25 cm分光器関係、9. 観測画像、10. 思い出のアルバム、11. 交代行動、12. 観測所の作業、13. 室内・設備、14. 施設の変革、15. 皇室アルバム、16. 新聞記事から、17. 月刊誌掲載、18. コロナ観測所、19. 乗鞍の風物詩、20. 乗鞍の動植物、21. 出来事、22. コロナ50周年の記録、23. 閉所直前の観測所、24. 図面類、25. 太陽コロナ集合写真、27. 日食関係、



写真1

写真2が「Japan Illustrated The Japan Times QUARTRLY MAGAZINE 1969. Vol. 7. No. 2」の表紙である。27ページから「OBSERVATORY ABOVE CLOUDS NORIKURACORONASTATION」という長沢進午所長の英文に記事が10ページにわたって掲載されている。極寒の山頂の風景、観測の様子、晴れ渡った北アルプスを背景にした観測所の風景、食事の様子、水の確保に雪の塊を水槽に入れる場面もある。最後のページには1965年に太陽に接近したIKEYA/SEKI彗星の写真が掲載されている。長沢先生はお会いした際「私は論文はまずロシア語で書いて、それを英語に、あるいは日本語にする」とおっしゃっていた。すでに鬼籍に入られている。写真3が「フォト1992年11月号」の表紙である。この号には「太陽面爆発フレアの謎を解く」という5ページの記事がある。1992年3月に完成した国立天文台野辺山太陽電波観測所の電波ヘリオグラフの紹介記事である。雲に隠れた八ヶ岳連峰、45mミリ波電波望遠鏡を背景に規則正しく配列された電波ヘリオグラフのパラボラアンテナ群が見開きのページに掲載されている。

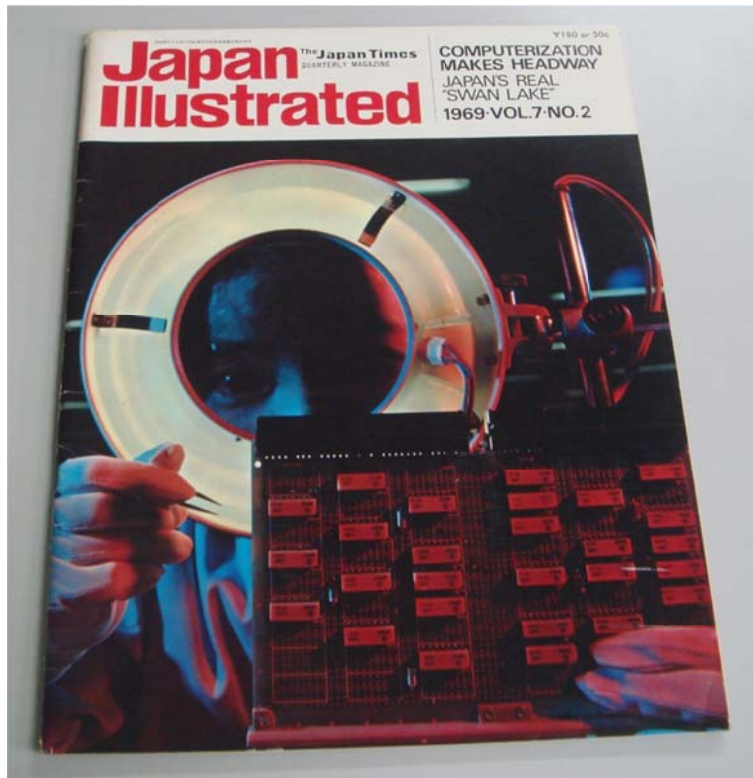


写真2 「Japan Illustrated 1969. Vol. 7. No. 2」

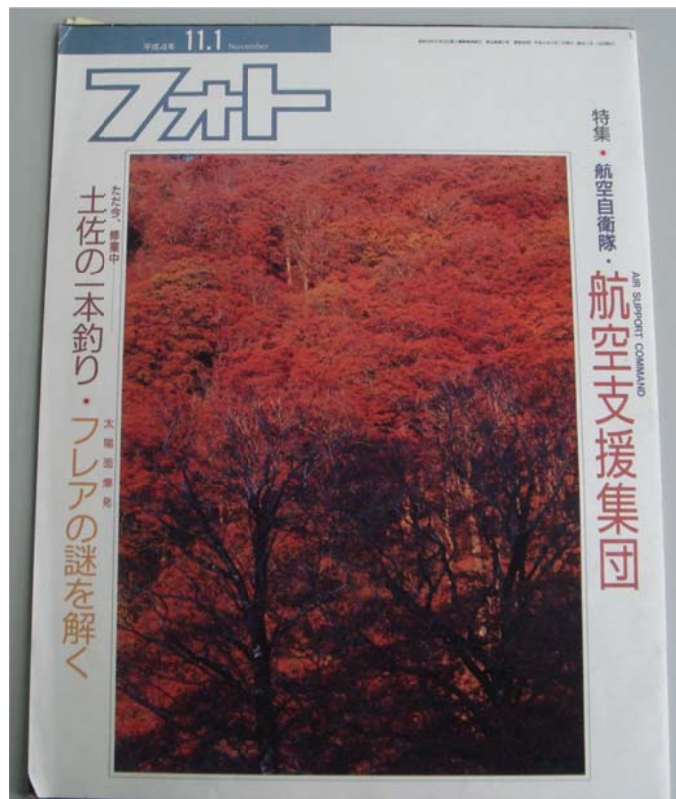


写真3 フォト 1992年11月号

写真3は、東京天文台時代の封筒2種類である。



写真3 東京天文台時代の封筒2種類

写真4は、日面経緯度線図が入っていた箱である。



写真4 日面経緯度線原図の入っていた箱

国立天文台では1998年までツァイス製20cm屈折赤道儀望遠鏡で太陽黒点のスケッチ観測を行っていたが、その黒点の位置を決める道具がこの日面経緯度線図で、太陽は地球から見て局がプラスマイナス7°振れるので、定規に使う線図は8種類が必要であった。写真5に例として0°、7°のものを載せた。

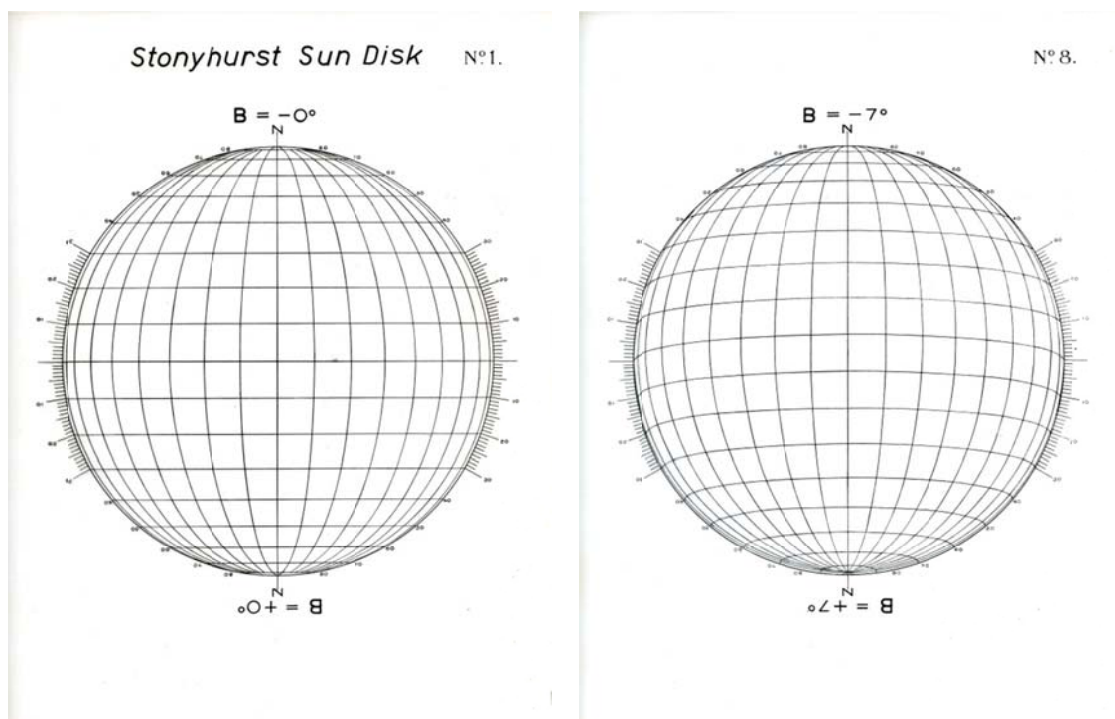


写真5 日面経緯度線図

これらアーカイブ室新聞の記事にお気づきのことがあれば、編集者中桐にご連絡いただければ幸いです。中桐のメールアドレスは、arcnaoj@pub.mtk.nao.ac.jp